

三年生 国語 学習プリント

三年 組 名前

まとめ



言葉を見つめる 『俳句の可能性』 宇多喜代子 『俳句を味わう』

教科書 P 66 ～ 70

1 次の文章は A の句について書かれた文章です。「俳句の可能性」で学んだことを生かしながら、空欄（ ）を埋めて、文章を完成させましょう。

A 空に咲く 曼殊沙華かな 赤とんぼ

曼殊沙華は、別名ヒガンバナとも呼ばれ、秋に真っ赤な花を咲かせる植物です。したがって、秋を表す（ ）でもあります。このことから、秋の一情景を詠んだ句であることがわかります。この句に、空の色は触れられていません。しかし、きっと、（ ）であったことが想像できます。（ ）の方が、ヒガンバナの赤、赤とんぼの赤が映えるからです。青と赤のコントラストが際立ちます。秋の空を見上げると、たくさんの赤とんぼが飛んでいた。まるで、真っ赤な曼殊沙華が、空に咲いているようだ、と、作者は空を見上げながら、思ったのでしょうか。作者は、ヒガンバナの方が、よく知られている花名であるのに、あえて難しい漢字四文字の曼殊沙華を選択したのかもしれませんが、またそこには意味があるのかもしれませんが。さらには、（ ）である「かな」にも、曼殊沙華にことさら別の意味合いが含まれていることを感じさせられます。ただ、俳句は、一句につき一季語がよいといわれています。この句には、秋の（ ）が、曼殊沙華以外にもあり、それが（ ）です。このような句を「季語重なり」ともいいます。この重なりを解消するためには、曼殊沙華か、赤とんぼ、どちらかを変える必要があります。あなたならば、どちらの言葉を選びますか。また、その言葉を選んだの何故ですか。もちろん、選んだだけでは、句は成立しません。あなたならば、どのような句に再構築しますか。情景を想像しつつ、一度、再構築に挑戦してみましょう。

